夏風遥先生

拝啓

盛夏の候、夏風遥先生におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

突然のお便りにて失礼いたします。私は神祀探幽と申します。民俗学および文化人類学を専攻し、各地に伝わる民間伝承や、土地に根差した信仰、あるいは人々の口承に残る奇妙な現象などを調査しております。

現在、私は夏空市において、子どもたちの間で語られている、ある不思議な存在について調べております。

彼らの話によれば、それは大人には見えず、子どもにしかその姿を現さないのだそうです。私は便宜上、これらの存在を「パラコ」と名付けました。子どもたちは、パラコが実在すると口を揃えて申します。もちろん、ただの空想や、子ども特有の遊びの延長と考えることもできましょう。しかしながら、複数の子どもたちから聞き取った話には、単なる偶然や模倣だけでは説明しがたい共通点が認められます。

そこで、私は子どもたちばかりでなく、この町で幼少期を過ごされた大人の方々にもお話を伺ってまいりました。

その折、かつて夏空療養所に肺結核で入院しておられたという方から、興味深い話を聞かせていただいたのです。

その方が幼い頃、療養所には長く入院している女の子がいたそうです。その少女は、身の回りに起こる不思議な出来事や、見知らぬものたちとの冒険を、絵日記に綴っていたといいます。

私は、その話を聞いたとき、少なからず驚きました。

というのも、その絵日記に記されていたという物語が、現在、夏空市の子どもたちから聞き取っている「パラコの噂」と、実に多くの点で符合していたからです。

民俗学の立場から申せば、世代を越えて伝承される物語は、語り継がれる過程で少しずつ変容していくものです。

語り手の記憶や時代背景、土地の風習などが影響し、元の物語は徐々に形を変えていきます。

ところが、今回の事例では、数十年の隔たりがあるにもかかわらず、物語の骨格が驚くほどよく保たれているように思われます。

これは、いささか不自然なことです。

さらに調べを進めたところ、その少女は夏風家のご縁者であったと伺いました。

先生もご承知のとおり、夏空療養所病院はすでに閉院して久しく、当時の記録や資料も散逸しているものと存じます。

もし先生のお手元に、療養所病院にお勤めだった頃の記録や、当時の患者に関する資料、あるいは夏風家に伝わる古い文書などがございましたら、ぜひ一度、拝見させていただけないでしょうか。

もちろん、先生のご都合や資料の性質もございますでしょうから、差し支えのない範囲で結構です。

貴重な資料をお借りすることが難しければ、閲覧だけでもお許しいただければ幸いに存じます。

不躾なお願いで恐縮ではございますが、私の調査にとって、これほど重要な手掛かりはございません。

ご多忙の折、誠に恐縮ではございますが、何卒ご検討賜りますようお願い申し上げます。

まずは書中をもちまして、お願い申し上げます。

敬具

平成十三年八月吉日

神祀探幽

夏風遥先生

拝啓

初秋の候、朝夕にはいくらか涼しさを感じる頃となりました。夏風先生におかれましては、お変わりなくお過ごしでしょうか。

先日は、たいへん貴重な資料をお見せいただき、誠にありがとうございました。

なかでも、夏風鈴さんの絵日記を拝見できたことは、私にとって望外の幸運でございました。
あの日、先生のお宅で頁を繰りながら、私は幾度となく目を疑いました。

そこに描かれていたのは、まさしく、現在の夏空市で子どもたちが語っているパラコの物語、そのものであったからです。

もちろん、細部には相違もございます。
現在の子どもたちの話には、絵日記には見られない登場人物や出来事がいくつか加わっております。
しかし、それらは物語の根幹を損なうものではなく、むしろ、子どもたち自身が想像を膨らませるうちに付け加えたものと考えれば、十分に説明がつきます。

それにしても、これほどまでに一致するとは。

私はこれまで、数多くの伝承や民間信仰を調査してまいりましたが、今回のような事例には、いまだかつて出会ったことがございません。

先生には、少々奇異に聞こえるかもしれませんが、実は私は、この種の話を単なる比喩や、子どもたちの空想としてのみ扱ってはおりません。

いわゆるオカルトと呼ばれる領域も、私の研究対象のひとつでございます。
世間では、科学的に説明のつかない現象を一括りにして、迷信や錯覚の類として片付けてしまうことが少なくありません。
しかし、説明できないということと、存在しないということは、同義ではないはずです。

私は、これまでの調査と経験から、我々の知る常識の外側にも、確かに何かが存在していると考えるに至りました。

それは、夏空市に限った話ではございません。

この世界には、我々がまだ理解していない奇妙な現象が、土地ごとに、また文化ごとに、さまざまな姿をとって現れているのではないでしょうか。
ある土地では神と呼ばれ、別の土地では妖怪と呼ばれ、また別の土地では、子どもたちだけが知る秘密の友人として語られる。
そうした現象のあり方は、土地の風土や信仰、そこに暮らす人々の常識、さらには何らかの固有の条件によって左右されるのではないかと、私は考えております。

夏空市には、夏空市なりの決まりがあると考えております。
例えばこの町において、奇妙な存在は「パラコ」という形でしか顕れるれることができないのかもしれません。
あるいは、もともと別の土地で生まれた存在も、この夏空市ではパラコという定義でなら顕れることができる、という可能性もあります。

いずれにせよ、私が注目しているのは、そうした現象の中心に、夏風鈴さんの絵日記が存在しているという事実です。

単に物語が似ているというだけではございません。
絵日記に描かれた世界と、現在の子どもたちが実際に体験したと主張する出来事との間には、奇妙な連続性が認められます。

もし、この町で起こっていることが、単なる伝承や模倣ではないとすれば。
そして、もし夏風鈴さんの絵日記が、何らかの形でその現象に関与しているとすれば。
私たちは、これまでの民俗学の枠組みだけでは到底説明できないものを、目の前にしていることになります。

先生には、今後とも、ぜひお力添えを賜りたく存じます。

もっとも、こうした話は、あまり大勢の方に広めるべきものではないのかもしれません。
現時点では、私自身も確証を得ているわけではなく、あくまで慎重に調査を進める必要が

あると考えております。

また何か新しいことが分かりましたら、ご報告申し上げます。

季節の変わり目でございます。どうかお身体を大切にお過ごしください。

敬具

平成十三年九月吉日

神祀探幽

夏風遥先生

拝啓

秋冷の候、日ごとに秋の深まりを感じる頃となりました。先生におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。

先般お借りいたしました夏風家に関する資料につきまして、ようやく一通りの整理と照合を終えました。
その過程で、いささか奇妙な事実が判明いたしましたので、取り急ぎご報告申し上げます。

夏風家の来歴を遡ってまいりますと、その始まりは戦国時代末期にまで遡るようです。
ところが、それ以前の記録が、どうにも見当たりません。

もちろん、古い家系の記録が途中で失われること自体は、さほど珍しいことではございません。
戦乱や火災、あるいは単なる散逸によって、先祖の記録が失われてしまう例は、全国各地にございます。

しかし、夏風家の場合、少々事情が異なるように思われます。

資料によれば、夏風家の祖先は、現在、夏凪神社を担っている一族と、古くから親交があったとされています。
そればかりか、時代を通じて、夏凪神社の一族から何らかの支援を受けていた形跡も認められます。
この点について、私は、ひとつの考えを抱くようになりました。

もっとも、これは仮説と呼ぶにも値しない、単なる妄想にすぎないのかもしれません。

夏風家は、かつてこの地を治めていた夏凪氏の、本家筋にあたる一族なのではないでしょうか。

戦国時代末期、秋津氏との争いに敗れた夏凪氏の一部が、その血脈を後世に残すため、名を改めて野に下った。

そう考えれば、夏風家の記録がその時期から始まることにも、ある程度の説明がつきます。
似たような例は、ほかの土地にも見られます。
戦乱の世において、敗れた一族が名を変え、表向きには別の家として存続することは、決してあり得ない話ではございません。

そうであるならば、現在の夏凪神社を担っている一族は、夏凪氏の本流ではなく、その傍流、あるいは旧臣の家系ということになります。
そして、夏凪氏の血脈を絶やさぬために、本来の一族を陰から守り続けてきたのかもしれません。

無論、現段階では、これを裏付ける確かな証拠はございません。
系譜の断絶や、家同士の交流だけをもって、血縁関係を推定することは危険です。

それでも、私は、この可能性を捨てきれずにおります。
なぜなら、この仮説が、夏風鈴さんの絵日記を巡る現象に、ひとつの新たな説明を与えてくれるからです。

夏凪神社に祀られているのは、土地神として信仰される夏凪権現です。
ご存じの通り、夏凪権現は戦国時代に犠牲となった夏凪氏の人々、を祀った神です。
特に、子どもたちを逃がして犠牲となった「すず姫伝説」で知られる「夏凪白雲の娘すず」のイメージが強い。
なので夏凪権現の神格には、土地を守護すると同時に、子どもを守護するという特性が含まれています。

もし、夏風家が本当に夏凪氏の血脈を引く一族であるならば、夏風鈴さんは、単なるひとりの少女ではなく、この土地の神と何らかの深い縁を持つ存在だったのかもしれません。

そして、彼女が幼い身で抱いた、強い願い。
その願いと、土地に根差した神格とが、何らかの形で結びついたとしたら。
現在の夏空市で起こっている一連の現象も、あるいは、その結果として生じたものなのではないでしょうか。
私は、これまでの調査を通じて、夏風鈴さんの絵日記が、この町における奇妙な現象の中心にあると考えてまいりました。

しかし、ここに至って、もうひとつの可能性が浮かび上がってきたのです。

それは、夏風鈴さん自身が、今なお、この町に何らかの形で存在し続けているのではないか、ということです。

少女の想い。あるいは、魂とでも呼ぶべきもの。

そのようなものが、あの絵日記を触媒として今も夏空市に留まり続けているのだとしたら。

子どもたちが語るパラコの物語は、単なる伝承ではなく、彼女が今なお続けている冒険の断片なのかもしれません。

そう考えると、絵日記に描かれた世界と、現在の夏空市の出来事が、これほどまでに一致している理由にも、ひとつの見通しが立ちます。

彼女は、あの日、絵日記の頁を閉じたあとも、物語を終わらせなかったのではないでしょうか。

病床にあって、限られた世界しか知らなかった少女が、絵日記の中に作り上げた、どこまでも広がる夏の世界。

そこでは、彼女は自由に歩き回り、友人たちと出会い、数え切れないほどの冒険を続けることができたはずです。

そして、その願いが、何十年もの時を越え、今なお、この町の子どもたちの世界に息づいているのだとしたら。

私は、それを単なる空想として片付ける気にはなれません。

先生。ひとつ、どうしてもお尋ねしたいことがございます。

夏風鈴さんは、どのような少女だったのでしょうか。

彼女が何を願い、何を恐れ、何を楽しみにしていたのか。絵日記に記された物語だけでは、どうしても知ることのできない部分がございます。

もし、先生が彼女について覚えておられることがございましたら、どのような些細なことでも構いません。ぜひ、お聞かせいただきたく存じます。

私の考えは、あまりに突飛で、学問の範疇を逸脱しているのかもしれません。しかし、どうしても確かめたいのです。

この町で続いている、終わらない夏の冒険。
その始まりに、夏風鈴さんがいたのだとすれば。
彼女は今も、どこかで笑っているのでしょうか。
あるいは、誰かが迎えに来るのを、ずっと待っているのでしょうか。
先生のお話を伺える日を、心よりお待ち申し上げております。

秋も深まってまいりました。朝晩は冷え込む日もございますので、くれぐれもご自愛ください。

敬具

平成十三年十月吉日

神祀探幽

神祀探幽先生

拝啓

初冬の候、神祀先生におかれましては、お変わりなくお過ごしのことと存じます。

お返事が遅くなり、申し訳ございません。
近ごろは、どうにも思うように筆が進まず、年齢を重ねるとは、こういうことなのかもしれません。

改めまして、先日はたいへん興味深いお手紙をいただき、ありがとうございました。
お会いしてお話をさせていただいたあとも、先生のお考えを幾度も思い返しました。

夏風鈴の絵日記と、今の子どもたちが語る物語との符合。
夏凪権現の伝承と、夏風家の来歴。
そして、あの子の想いが、今もこの町に何らかの形で残っているのではないかというお話。

初めは、にわかには信じがたいことと存じました。

しかし、先生のお考えを拝聴するうちに、私もまた、そうであればよいと考えるようになりました。

あの子が、今もこの町のどこかで、絵日記に描いたような冒険を続けているのだとしたら。

神祀先生。
もし、あの子の魂のようなものがまだこの町に存在していて、彼女の望んでいた冒険をしているのでしたら、私の犯した罪も